第24回 自主制作映画コンテスト 11.21土・11.22日 海野町「犀の角」

■大賞作品、各審査員賞作品の発表は22日(日)の上田映劇の表彰式で・大賞作品も22日(日)上田映劇で上映



【となりのトナ】2026年(24分)

監督＝三坂知絵子

あらすじ 小学５年生のホノは教室の片隅で古びた陶器の花瓶を見つけた。その日からホノは不思議な少女が自分のとなりにいるように感じる。考古博物館の学芸員マナブから、その花瓶がかつて何であったかを教わるホノ。考古博物館で作った土笛の音に重なるように、どこからか少女の歌声が聴こえる。

作品のメッセージ 現代を生きる少女が一つの古い陶器と出会い、その中に隠された歴史を紐解いていくなかで、過去を単なる歴史的知識としてではなく、かつて確かに生きていた誰かの手に宿る記憶として感じていく物語を描きたいと思いました。本作が、時代を越えて観客のとなりに静かに寄り添い、新たな表現を生み出すきっかけとなることを願っています。

監督自己アピール 山口県下関市出身。俳優、演技講師。2018年、子どもたちの文化的活動を支援する団体「リトルプロフェッショナル・ジャパン」(LPJ)を立ち上げ、親子向け演技ワークショップや芸術活動に関する制作現場環境の調査研究などをおこなっている。

第24回 自主制作映画コンテストノミネート作品 (順不同)



【我愛你生活】

2026年(63分)

監督＝森田和樹

あらすじ 高校生の頃から役者になりたかった赤江二胡は、役者も生活も上手く行かずにうだつの上がらない日々を過ごしていた。そして二胡の彼氏が浮気をし別れる事になり、同棲部屋から追い出されてしまう。二胡は友人のフォンファに頼み、フォンファの家に転がり込む。フォンファと夢の話をしながら、二胡の日々はゆっくり過ぎて行く。

作品のメッセージ 俳優の中原つばさと企画した作品です。中原の作りたい映画と、自分が悩んでいた事、お互いに先行き分からない事を今していて、絶対大丈夫なんて言葉がない事への向かう気持ちのリアルさを描きました。映画を撮り始めて10年が過ぎて、11年目。

監督自己アピール 気づけば、自主短編も長編も商業デビューもピンク映画も映画と言う名の物を色々と撮りながら、また11年目に自主映画を撮りました。結局、商業とかピンクとか自主とかボーダーを引かずに映画を撮らないと気が済まない性格です。



【パズル残念ながら1ピース】

2026年(43分)

監督＝林真子

あらすじ 人生の終わりを迎えた75歳の輪子は、病床で自身の人生を走馬灯のようにたどり直す。息子の事件をきっかけに、友情や恋愛、育児、仕事など、数々の選択と向き合いながら人生を見つめ直していく。もしこの人生が何度も繰り返されるのだとしたら、輪子は後悔ごと自分の人生をもう一度生きたいと思えるのか。シュールな世界観と一軒の家を舞台に、記憶と意識の旅を描く物語。

作品のメッセージ 本作は、一人の女性・小波輪子の人生を、「4人の輪子」という異なる俳優を通して描く物語です。4人の輪子たちが同じ空間に存在し、それぞれの記憶や感情が交錯することで、一人の人間の人生を多層的に映し出します。本作は、後悔や虚しさを抱えたまま、それでも人生を肯定しようとする一人の女性を描きました。

監督自己アピール 1996年生まれ。兵庫県育ち。大学ではファッション学科に進学。大学3年生の時に映像学科の卒業制作に衣装部や美術部として参加。大学卒業後は主に美術部として作品に参加。大学時代の仲間と映像制作団体「世田谷センスマンズ」を結成。



【硝子のスーツ】

2026年(79分)

監督＝白田悠太

あらすじ 演劇サークルに所属する大学４年生の悟(さとる)は、卒業公演の稽古終わりに親しい後輩の創介(そうすけ)に呼び出され、悟に対して抱いているこの感情が友情なのか恋愛感情なのか分からない、という告白のような相談を受ける。しかしそれはサークルの仲間たちが仕掛けた告白ドッキリであった。笑って済ませていた悟だったが、この出来事をきっかけに創介に対して抱いていた特別な感情に気づき始める。

作品のメッセージ 制作中に期せずしてこの映画の主人公と同じ状況になった私を待っていたのは、自分のせいで大切な人が自殺してしまったかもしれないという罪悪感と喪失感でした。それとどう向き合っていけばいいのか分からない私のリアルな心境を、この映画に映しました。

監督自己アピール ジャンル問わずマイノリティの人々を描いた映画を作っています!



【宙ぶらりんの家】

2026年(50分)

監督＝渡邉高章

あらすじ 誰も住まなくなった実家の記念写真を撮るため、東京から岸和田へ帰省した鈴里。俳優業も恋人との関係もうまくいかず、行き場のない思いを抱えていた彼女は、映画監督を目指す友人・暁斗や姉・柚里との時間を通して、自身の過去や現在と向き合っていく。大阪・岸和田の風景の中で、一人の女性の小さな変化を静かに描く物語。

作品のメッセージ 『宙ぶらりんの家』は、主演の堂ノ下沙羅さんから「幼い頃過ごした実家がなくなってしまう」という話を聞いたことをきっかけに生まれました。住まいを失うことは、記憶や家族の歴史と向き合うことである——そんな思いから脚本を執筆しました。また本作は、夢に敗れた一人の女性が自らの人生を選び直す物語でもあります。ご覧になった皆さまが少しでも前向きな気持ちになっていただけたら嬉しいです。

監督自己アピール 誰にでも、帰りたくなる場所や、忘れたくない風景があります。『宙ぶらりんの家』は、失われゆく家を通して、記憶と家族、そして人生の選択を描いた作品です。諦めることも、自分で選び抜いた道なら前へ進む一歩になる。そんな思いを、この映画に込めました。

第24回 自主制作映画コンテストノミネート作品（順不同）



【交換家族】

2026年（28分）
監督＝粟島瑞丸

あらすじ　大規模災害の混乱で出生時に取り違えられ、別々の家族に育った19歳の少女二人。真実を知った彼女たちは、本当の家族と向き合う旅の中で、「血縁」ではなく自ら選び取る家族の意味を問い直していく。

作品のメッセージ　出生時の取り違えをきっかけに、「家族とは何か」を静かに問いかける物語。血のつながりや共に過ごした時間だけでは測れない関係の中で、2人の少女は自分が戻る場所の意味と向き合っていく。

監督自己アピール　1981年生まれ。大阪府出身。俳優・脚本家・演出家。演劇集団 Z-Lion(ジーライオン)の主宰を務めている。活動の場は舞台だけに留まらず、TV ドラマや映画等、映像の脚本も手掛ける。



【おむかえ】

2026年（27分）
監督＝三宅美和子

あらすじ　引っ越しを機に夜間保育園へ通うことになった5歳のハナ。慣れない園で心細さを募らせ、静けさに耳を澄ましながら、孤独な夜をひとり過ごす。小さな心の揺れをそっと映す一夜の物語。

作品のメッセージ　本作は、幼い頃に知らない場所で母を待ち続けた私自身の記憶をもとにつくりました。個人的な体験を出発点としながらも、映画として紡ぐなかで、観てくださる方の記憶や過ごしてきた時間とどこかで重なることを願っています。この物語が、皆さんの心の中にある風景と静かに響き合えたら嬉しいです。

監督自己アピール　2000年、岡山県生まれ。2026年早稲田大学文化構想学部卒業。在学中の映像制作実習にて本作を制作した。現在はアルバイトをしながら、映画美学校ドキュメンタリー・ワークショップ制作基礎に通っている。



【ハイヌーン・クレイジー 極午狂】

2025年（24分）
監督＝金内健樹

あらすじ　とても暑い夏の日、家で涼んでいるハルカに恋人のナツキから電話がかかってくる。プール帰りに暑さで往き倒れたナツキを迎えに、ハルカは猛暑日の住宅地を団地へと向かう…。東京郊外の住宅地で繰り広げられる、真夏の日中の狂気ファンタジー！

作品のメッセージ　盛夏の日中、"暑さで頭がおかしくなっていって不思議なゾーンに入っていく"というだけの話を、本当に暑さで頭がおかしくなりそうな2025年の猛暑日に映像に記録しました。
アパート／住宅街／団地。これらをロケーションとした日向と日陰と地面の影がおりなす日常風景に現れたアトラクション感と、夏の暑さによる夢うつつをお楽しみください。

監督自己アピール　監督+主演の総勢2名だけで色々と短編～中編映画を作ってきました。今作は「倉里晴という最高の役者×夏という季節×近所のロケーション」を最も魅力的かつエモーショナルに切り取る…という私の最も得意とする事ができたと思います。



【近視くん】

2026年（24分）
監督＝岡田奈津美

あらすじ　眼鏡が普及しておらず、近視が障害として扱われている世界。女子高生、生駒あたりのクラスに障害者学級から鶴見秀一郎が転入してくる。飄々として一風変わった鶴見くんの行動に、クラスメイトは嘲笑の目を向けている。しかしあたりはそんな鶴見くんのことが少し気になる。授業ノートを見せたことで鶴見と仲良くなったあたりは、鶴見に明確な好意を抱くようになる。

作品のメッセージ　この、人類は皆地続きであると言う考えを映画にしたいと考え企画しました。主人公あたりの恋も自己嫌悪も、一緒に体験していただければ嬉しいです。さらに私は普段から「既存の言葉に囚われない、ある二人の関係」というテーマを持って映画を制作しています。主人公ふたりの関係性が見た人によって多面的に映る様な作品になっているのではないかと思います。

監督自己アピール　東京生まれ。大学映画サークルで学生映画と出会う。その後大学中退、医学部に再入学し、医学を学びながら映画制作を続けていた。現在も研修医として勤務する傍ら、自主映画制作を行なっている。お笑い、音楽、編み物、謎解き、チョコミントが好き。今後も医師として働きながら、より沢山の方に届く作品を撮り続けることが目標。



【それまでここにいてあげる】

2026年（56分）
監督＝吉川啓太

あらすじ　人が亡くなってから天国へ行くまでのもしもの話を描いたファンタジードラマ。海沿いに立つ学校のボランティア部に案内された死者は、部長から『天国に行く前に夢を一つだけ叶えられる』と告げられる。その願いが叶えば天国へたどりつく。死者の願いを叶えてあげようとする部長だったが一方で、死後の世界へ踏み入れることに戸惑いを示す仲間もいるのだった。

作品のメッセージ　近年、信号無視の車にはねられるなど、なんで今!?みたいな死の瞬間が多くあるように思っています。『死』や『旅立つこと』がテーマではありますが、あくまでマイペースな主人公・叶が見ている明るい世界、大人になって「あいつおもしろかったな」と気づくような新の性格、この2人を通してポップな世界で死を見送っていただけると嬉しいです。

監督自己アピール　今とは役名と設定も違ってどんな展開にするかもわからないままに書き始めたものが、いろんな人の手を借りて一緒に1つの映画を作ることができました。大好きな映画に「映画って好きを言葉にせずいかに好きを伝えるかが肝心じゃん」というセリフがあります。映画とは何なのか全く分からないけれど、少しでもそうなっていたらいいなと思います。



【Special Thanks】

2025年（15分）
監督＝松本大志

あらすじ　映画学校に通う竹元は、自身が監督脚本を務める短編映画の準備をしている。映画撮影には浦部、藤吉をはじめとした同期の生徒たちがスタッフとして参加し、俳優のユンと兼平が出演する。

作品のメッセージ　俳優たちとのワークショップを通して作り上げた作品です。短い尺の中で5人のキャラクターを生き生きと描くことを意識しました。

監督自己アピール　たのしく映画を撮っています。



【On the Side Street】

2026年（29分）
監督＝山科晃一

あらすじ　覚醒剤取締法違反で服役した過去を持つ真田啓次郎は、社会復帰を目指して働きだした工場で、予測不能な行動をとる22歳のフリーター、森山千穂と出会う。過去を背負う真田と、今を生きることに不器用な千穂。そして、工場長の佳代子もまた、自身の過去の傷を抱えながら、二人の姿を見つめていた。

第24回 自主制作映画コンテストノミネート作品

作品のメッセージ　『On The Side Street』はタイトルの通り、人生の横道に逸れてしまった人間が、それでもひたむきにその道を生きている、という "人間讃歌" を描くものです。清濁合わせ持つ "人" の存在に真正面から向き合い、それを全肯定し、「ともに生きていく」兆しや勇気を、この映画によって与えられたらと思っております。

監督自己アピール　日常の中にある小さな違和感や、人と人との距離を見つめながら、「こんな世界の見方もある」と思ってもらえる映画を作りたいと思っています。映画を通して、まだ見たことのない景色に出会ってもらえたら嬉しいです。



【Stuck Inside The Hell Of Koenji】

2026年（63分）
監督＝淀川十三

あらすじ　映画監督になる夢を諦め、小説家を志すも何も書くことができず、夢追い人が集う街・高円寺で惰性の日々を送り続けていよいよ３０歳になろうとする男が、なんとか高円寺から抜け出し、人生の次のフェーズへ進もうとする物語。

作品のメッセージ　見慣れた高円寺の景色が再開発で変わっていく様子を見るうちに、当たり前にあるものなんて何一つないのだと感じた。高円寺という、大人になりきれない大人たちが群がる個性的で救いようのない街に約10年住んで味わった苦楽を街の景色と共に記録したいという思いから、この映画を作った。

監督自己アピール　大阪出身。東京在住。インディーズ映画を中心にテレビドラマ、CMなどの助監督を経て現在は知的障害者の自立生活支援に従事しながら映画制作をしている。



【私すぎる】

2026年（39分）
監督＝太田いず帆

あらすじ　コロナ禍で仕事を失った売れない女優・さやか。家族や友人に背中を押されてマッチングアプリを始めるも、出会う男達との関係は悉く空回り…。孤独と承認欲求の狭間で揺れる一人の女優の、痛くて少し可笑しい再生の物語。

作品のメッセージ　コロナ禍で俳優としての仕事やオーディションが途絶えて、自分の生きる価値や存在意義を見失ってしまった経験を出発点にしています。誰かに選ばれるのを待つだけではなく、自分で自分の人生を選ぶ事。その小さな気付きに辿り着くまでの過程を、この映画に込めました。

監督自己アピール　コロナ禍の日々をなかった事にしたくない、きっと意味のある時間だったと信じたく、制作しました。撮影は長回しを基本に、仲間達と芝居を追求し、どのシーンもファーストテイクで決められるように撮影を進めました。俳優として、そして一人の人間として、今の自分の全てを注いだ初監督作品です。



【星屑をさがす男】

2026年（21分）
監督＝岩田隼之介

あらすじ　とある街にやってきた男・星野は、古い友人の角田の力を借りて、絶縁関係にあった弟に会いにきた。半地下の駐車場にひそみながら道ゆく人々をうるんだ瞳でまなざす星野は、自分がほんとうに求めているものが何なのか分からないまま、街にただよう。

作品のメッセージ　過去は常に今の自分を追いかけてくると、日々実感します。星屑という言葉の儚さに導かれて、宇宙を漂うように街を歩く2人の中年男性の姿をとらえました。

監督自己アピール　愛知県にてミニマムな映画づくりを探求しています。自分の作るべき映画、作りたい映画は何なのか、日々たのしく真剣に考えています。面白すぎます映画づくり。



【死神から守り 吸血鬼を遠ざける】

2026年（34分）
監督＝原田捷

あらすじ　小さなアパートで幸せに暮らす恋人たち。2人はある晩、打ち上げ花火のような音を聞く。深夜に打ちあがるはずがないと話し、眠りにつく。2年後、一人住まいとなった家で男は同じ音を聞く。男は家を出て、花火を探し始める。

作品のメッセージ　これがあったから私は他人のことを基本的には信用できる、と思わせてくれるような人との親密な関係の記憶について描きました。そういう記憶は日常の隅々に浸透し、感情を呼び起こさせ、ルーティンをこなすだけの機械人形になることを防ぎます。見た人がそれぞれの親密さの記憶を手繰り寄せる助けとなることを望みます。

監督自己アピール　私はこれまで物語性を重視して作品を制作してきましたが、本作においては物語の伝達は最小限に抑え、映像と音そのもののあり方によって見た人に感情を呼び起こさせることを試みました。これからも映画の様々な可能性を探求しながら作品を制作していきたいと思っています。



【となりのトナ】

2026年（24分）
監督＝三坂知絵子

あらすじ　小学5年生のホノは教室の片隅で古びた陶器の花瓶を見つけた。その日からホノは不思議な少女が自分のとなりにいるように感じる。考古博物館の学芸員マナブから、その花瓶がかつて何であったかを教わるホノ。考古博物館で作った土笛の音に重なるように、どこからか少女の歌声が聴こえる。

作品のメッセージ　現代を生きる少女が一つの古い陶器と出会い、その中に隠された歴史を紐解いていくなかで、過去を単なる歴史的知識としてではなく、かつて確かに生きていた誰かの手に宿る記憶として感じていく物語を描きたいと思いました。本作が、時代を越えて観客のとなりに静かに寄り添い、新たな表現を生み出すきっかけとなることを願っています。

監督自己アピール　山口県下関市出身。俳優、演技講師。2018年、子どもたちの文化的活動を支援する団体「リトルプロフェッショナル・ジャパン」（LPJ）を立ち上げ、親子向け演技ワークショップや芸術活動に関する制作現場環境の調査研究などをおこなっている。



【タイム郎】

2026年（28分）
監督＝田口令

あらすじ　世界一規則正しい人間を目指す少年、タイム郎はショック療法を受ける……！

作品のメッセージ　「私は世界一規則正しい人間になればいいのだろうか。」そんな疑問が、規則に囚われた「タイム郎」というキャラクターを生みました。彼と一緒に旅をするように脚本を書き進めることで、私自身も少しずつ、自分なりの自由の形を模索しました。（つまり物語ありきではなく、キャラクターから生まれた映画なのです）タイム郎は当時の私そのものです。

監督自己アピール　作品づくりでは、自分自身の体験を出発点にすることが多くあります。日常で感じた理不尽、不満、怯え、劣等感をそのまま終わらせるのではなく、映画という形で昇華しています。それと同時にユーモアも大切にしています。